

恵泉花の文化史(1)

コチョウラン

西村 悟郎(英米文化学科)

コチョウランの和名で日本で親しまれているファレノプシス (*Phalaenopsis*) 属には約 50 種が含まれ、ヒマラヤ、インド、インドネシア、オーストラリア北部、フィリピン、台湾などに分布する。

重要な原種としては、白花の交配親になっている *P. aphrodite* (タイワンコチョウラン) や *P. amabilis*、ピンクの花の親である *P. shilleriana*、黄色や模様花の親となっている *P. lueddemanniana* などがある。

コチョウランは最近の日本では、最も人気のある洋ランになってきた。家庭で育てられる洋ランとしては、これまではシンビジウムに圧倒的な人気があったが、最近では、それに代わる勢いでコチョウランの需要が伸びてきている。最近のコチョウランの人気を通して、日本の花文化の特徴を見ることができる。

1. 名前に惹かれる

洋ランの中で和名で通用しているのはコチョウランだけである。カトレヤ、デンドロビウム、パフィオペディラムなど他のランは、すべて学名がそのまま使われている。親しめる名前、これは人気を得る大切な要素である。また、名前と花の形が一致するのも親しみがもてる。漢字では胡蝶蘭と書く、これは日本名で、中国名は蝶蘭である。学名の *Phalaenopsis* は、ギリシャ語の *Phalina* (蛾) と *opsis* (似る) からきており、英名も *moth orchid* である。いずれも花の形が蝶や蛾に似るところから付けられた。東洋では蝶、西洋では蛾という連想の違いも面白い。

2. 住環境が洋ランの好みを変える

コチョウランは越冬のための最低気温が 15℃以上を必要とするので、かつては温室のない一般家庭では栽培が難しいとされてきた。そのために、低温に強いシンビジュウムが好んで栽培された。ところが、最近住宅の気密性が増し、冬季でも室温を 15℃近くに維持することがそれほど困難ではなくなってきた。また、植物の交配育種や個体の選抜・改良が進んで、比較的低温に耐えられる品種も出まわってきている。そのため、新しい洋ランとしてコチョウランの人気が高まってきたといえる。

3. 豪華さと、つましさを併せ持つ

国会議員のテレビ会見などで、背景に鉢植えのコチョウランが何鉢も置かれているのを見ることがある。大輪のコチョウランの鉢物は、最も豪華な贈答品として使われる。

これは、いわば日本の豊かさの象徴である(図 13)。

一方、洋ラン展の即売コーナーで、最もお買い得なランの中に小輪のコチョウランがある。これならどんなに狭い部屋でも、十分に花を楽しめる。コ

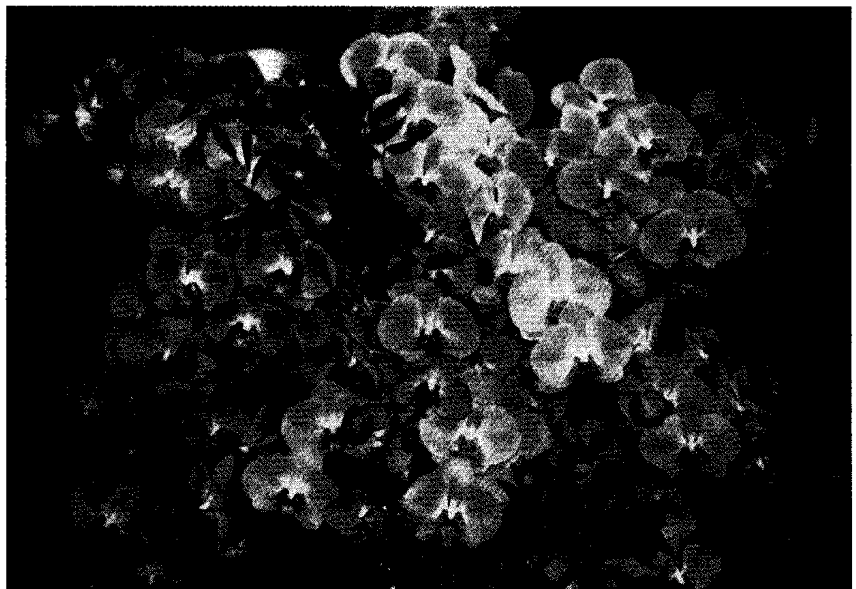


図 13 *Phalaenopsis schilleriana* 系の桃花

チョウランは開花期が長く 3ヶ月くらいは咲きつづけるので、十分に値段の元が取れる。これは、つましい日本の現実の象徴である。

4. 洋ランの中で原産地が日本に最も近い

コチョウランの自生北限は台湾で、多くの洋ランの中で最も日本に近い。

戦前から台湾コチョウランの名前でその存在が知られ、その頃には唯一の国内産の洋ランといわれた(図14)。日本でコチョウランの人気が高いのは、日本人の中にある潜在的な親近感にあるのかもしれない。小型の白花をたくさんつけるタイワンコチョウランは、現在でも人気があって広く出まわっており、低温に強いその性質が好まれている。



図14 *P. aphrodite* (タイワンコチョウラン)

5. コチョウランの開花は自由に調節できる

コチョウランは普通の栽培下では春から夏にかけて数枚の葉を展開し、秋に花茎を伸ばして、冬に開花する。そのため、1960年代まではコチョウランは冬にしか開花しなかった。

1970年代になって、結婚式用のブーケの花材としてコチョウランの需要が増加してくると、開花調節の技術開発が始まった。大学を中心に、コチョウランが開花するための条件が調べられ、株を高温下に置くと開花が起こらず、その株を低温に移すと開花することが明らかとなった。その研究結果を受けて、生産者は高温度と低温度の2つの温室を設けて、2室間で植物を移動させることによって、開花を自由に調節する技術を開発した。1980年代後半になるとその開花調節技術はほぼ完璧となり、花屋さんには一年中コチョウランの花が見られるようになった。

一鉢に数本の花茎をつけた豪華なコチョウランの鉢物はその様にして作られているのである。これは日本で開発された独特の技術で、一年中コチョウランの花鉢を買うことができるのは日本だけである。これもコチョウランの人気を支える大きな要因となっている。ただし一方では、これは冷房や暖

房のために電気や油を使う、エネルギー多消費型の生産技術でもある。

参考文献

石田源次郎・川瀬晃四郎. ファレノプシス. 塚本洋太郎監修. 園芸植物大事典. 小学館. 1989.

石田源次郎・坂西義洋. ファレノプシスの生育開花習性と温度の影響について. 園芸学会秋季発表要旨. 1974.

市橋正一編. ファレノプシス. 誠文堂新光社. 1993.

坂西義洋・今西英雄. ファレノプシスの生育開花習性と温度の影響について (第2報) 開花にたいする温度処理効果. 園芸学会春季発表要旨. 1977.

西村悟郎・小杉清. ランの花芽分化に関する研究 (第6報) *Phalaenopsis* の花梗伸長および開花に及ぼす温度と日長の影響. 園芸学会春季発表要旨. 1972.